

# 10年経験者研修専門講座覚え書き

角 一典

(北海道教育大学旭川校)

The Note of Training Course for Teachers Experienced for 10years.

Kazunori KADO

## 1. はじめに

北海道教育大学では、2004年度から北海道教育委員会と連携して10年経験者研修専門講座を実施している。2004年度に札幌校と岩見沢校において実施された専門講座は、2005年度から全キャンパスで開講されることとなり、小中学校の夏季休業期間中において研修が実施されている<sup>1</sup>。

筆者は、2006年夏に、社会科教育の専門講座として、小中学校の教員を対象として「廃棄物問題と環境教育」を開講した。しかしながら、実施にあたっては、全くの白紙の状態からのスタートとなり、開講前の準備も、そして開講中も、かなり手探りの部分が大きかった。本稿は、開講前の準備から実施に至るまでの一連の過程を記述するものであるが、その目的は、自身の講座を振り返るとともに、文章の形で情報を残すことによって、今後の実践に対して多少なりとも貢献することにある。

本稿では、筆者の開講した講座の概要(第2章)実施内容の概要について紹介し(第3章)講座に対する受講生の評価を紹介し(第4章)簡単な自己評価を加え、講座に関する自己総括を行う(第5章)。

## 2. 講座の概要

筆者の講座は、先に記したとおり「廃棄物問題と環境教育」という講座名とした。その意図は、筆者が学生とともにやってきた廃棄物問題に関する研究を通じた経験から、廃棄物問題の解決に際して環境教育がきわめて重要な意義を有するということを指摘する論者が多く存在するという事実、そして、実際に筆者自身も、制度的な整備だけでは廃棄物問題の完全な解決は不可能であるということを感じたことから、学校教育において、直接にあるいは間接に、廃棄物に関する環境教育がさまざまな場面で行われる機会を増やすことにある。募集時に掲げた研修内容は、「廃棄物問題に関する情報収集・施設見学・議論を通じて、現状を理解し、子供たちの環境教育に対して、どのように取り組んでいけばよいのかを検討する」というものであった。

こうした講座名を掲げたことにより、筆者は主に2つの流れを意識する必要に迫られた。一つは、受講者が廃棄物問題に関する知識を求める可能性があるということ、もう一つは、受講者が環境教育のノウハウを求めてくる可能性があるということである<sup>2</sup>。この点については、実際に受講者に確認するまではどちらの方向で進めばよいのか判断できない問題であるため、どちらにも対応できるよう準備をしておかなければならなかった<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 2005年度は、夏季3日間・冬季2日間の日程で行われたが、受講生からの改善要求が多数あったために、2006年度から夏季5日間の日程に改められている。

<sup>2</sup> あらかじめ断っておくと、筆者は環境教育の専門家ではないし、環境教育を体系的に学んだこともなかった。したがって、付け焼刃になってしまうとわかりつつも、開講前に、廃棄物問題に関する環境教育について学ばざるを得なかった。しかしながら、その経験は筆者にとって非常に有益であった。教育というと、観念的に「教える者」と「教えられる者」との二分法で考えがちであるが、実際には、教える者はより多く学んでこそ教える者となりえるということを経験させてもらった。

<sup>3</sup> 結果として筆者は、講座の冒頭で、課題として「廃棄物問題においてなにが問題なのかを知ること、廃棄物問題をどうすればよいかを考えること、廃棄物問題に対して、今われわれになにができるかを考えること、の3点を基礎としつつ、学校教育における環境教育の可能性を検討することを掲げた。二方面体制を取りつつも、最終的には筆者にとってより多くの情報提供が

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
9:30-11:00	(共通講義)	講義 「廃棄物減量の試み」	講義 「外国における廃棄物処理」	報告準備 (グループディスカッション)	予備 (報告準備 or 関連映像の視聴)
11:10-12:10		班分け・コンセンサステスト	ラベルワーク		
13:30-15:00	講義 「日本の廃棄物処理の現状」	見学 スーパー 「ダイイチ」	見学 近文清掃工場・リサイクルプラザ	(インターネットによる情報検索)  (レポート作成)	報告会
15:10-16:40	講義 「容器包装リサイクル法と財政」	ラベルワーク	講義 「焼却処理のメリットとデメリット」		

講座を開講するにあたり、筆者は表1のようなタイムスケジュールを設定した。ここにおいて意識したのは、第一に、一定程度の意識のある受講者が集まるであろうということを前提として、受講者自らが能動性を持って講座に臨めるような構成にすることである。そのため、ラベルワーク・報告準備の時間を多めに確保した。第二に、施設見学などを盛り込むことにより、フィールドワーク的な要素を取り入れたことである。第三に、講義についてはやや高度な内容を取り扱うこととしたことである。

募集時は、少人数のゼミ形式で講座を運営することを念頭に計画を考えたため、太字で示してある部分は、運営方法を別の形で考えていた<sup>4</sup>。しかし、最終的な受講者数が22名となったため、個別レポートの作成が時間的に不可能になったため、グループレポートによる最終まとめを行う形を取るために表1の形となった。

### 3. 実施内容の概要

#### (1) 講義<sup>5</sup>

先述のとおり、講義については、廃棄物問題に関する関心の高い受講者が多いという仮定に立ち、小中学校で行われる環境教育に有用と思われる、やや高度な内容を多めにすることを意識して構成した。また、質問時間を確保するため、1コマ当たりの講義時間(90分)に対して、10~20分くらいの余裕が生まれるように配慮した<sup>6</sup>。

内容としては、大きく二つに分けることができる。すなわち、日本の廃棄物処理の現状把握と、日本に止まらず、外国の事例も含めた廃棄物問題解決のための努力についてである。前者は、表1の、後者は にあたる<sup>7</sup>。

日本の廃棄物問題の現状に関しては、「日本の廃棄物処理の現状」において、法律上の基本的な知識と廃棄物量の推移および最終処分場のキャパシティについて、「容器包装リサイクル法と財政」では、新たに日本の廃棄物行政における枠組みを形成した容器包装リサイクル法の概要および実施の現状と、容器包装リサイクル法制定にともなって増加した廃棄物処理費用の実態について、「焼却処理のメリットとデメリット」では、日本が、なにゆえに国際的に稀にみる「焼却主義」に基づいて廃棄物問題を解決しようとしたか、そして、そのために発生している問題がどのようなものかについて、それぞれレクチャーすることを試みた。

また、「廃棄物減量の試み」では、現状で着手することのできる対策を示すとともに、市民・企業・行政による、先進的な廃棄物減量の努力を紹介し、「外国における廃棄物処理」では、日本の容り法が参考にしたといわ

可能である、廃棄物問題に関する基礎的知識を学ぶという方に重点を置く方向で講座を構成したのである。

<sup>4</sup> ちなみに、班分け・コンセンサステストの部分は、3回の講義を踏まえてグループディスカッションを、報告準備においては、個別指導の時間を確保することを考えていた。

<sup>5</sup> 講義時に配布したレジュメは以下を参照 (<http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/research/staff/kado/gomi.htm>)

<sup>6</sup> 結果的には、質問はほとんど出なかったため、後半の講義は、事前に準備していた内容にさらに情報を付加する必要が生じた。

<sup>7</sup> 2.3.2でも言及するが、 が最後になっているのは、清掃工場見学の日程に合わせてのことである。

れるドイツの法律とシステムに関する解説とヨーロッパにおける環境教育の実践例について講義を行った。

## (2)ラベルワーク

本講座ではラベルワークを行うこととしたが、その目的は、受講者たちにこれまでの研修成果の整理をしてもらうことと、最終報告に向けての問題発見を行うことであった。さらに、ラベルワークという方法を実践してもらうことによって、学校教育の場での応用の可能性を拓くことも、副次的な目的として考慮するものであった<sup>8</sup>。

基本的にはKJ法に則った作業を行った。手順は以下のとおりである。

廃棄物問題にかかわるキーワード・短文を、10項目を目標に各自書き出す。その際、キーワードはラベルの上部に書き、下部は書き込めるように空けておくように指示。

それぞれのラベルについて、書いた者が説明しながら、説明の内容や説明の際に出てきた重要な言葉等を、適宜下部の空欄に記載するよう指示。

ラベルのグルーピング。関連すると思われるラベルを集め、色の違うラベルでグルーピングされたラベル群のキーワードを記載する。

ストーリーの構築。の作業で抽出されたキーワードを順序だて、報告のためのストーリーを構築する。

プレゼンテーション。ラベルワークの結果をそれぞれのグループが報告。報告後に自分たちの報告を振り返り、最終報告に向けての課題の析出を行う。

## (3)施設見学

施設見学は、当初一日を割り当てて、最終処分場やPETボトルおよび容器包装の中間処理場、日本製紙の付属施設である紙遊館なども含めた関連施設を広範囲に周ることを考えていたが、移動手段の確保と時間的な困難とにより、予定を大幅に縮小して、大学に近くアクセスしやすいスーパーと清掃工場およびリサイクルプラザに絞った。

### )スーパー見学

スーパー見学の目的は、3回目の講義を参照しつつ、スーパーの行っている努力・グリーンコンシューマーとしてどのような選択があるのか・現状におけるグリーンコンシューマー化の限界を把握することであった。

スーパーの努力としては、リサイクル回収ボックスの設置、果物・野菜売り場などで、裸売りのものが多数存在し、ラップやトレーの使用を抑制していることなどをみもらった。

グリーンコンシューマーとしてとしての選択肢としては、以下の点について受講者に注目してもらった。

- ・サランラップには、ポリエチレン(ポリオレフィン系)製とポリ塩化ビニリデン製があり、ダイオキシン問題の観点からは、ポリエチレン製のほうが環境にやさしい。
- ・おつまみ・レトルト食品などでは、トレーのあるもの・紙箱入りのものとそうでないものがある。トレーや紙箱を使用していないものの方が廃棄物量を削減できる。
- ・酒類の瓶の一部はリターナブルであること。ただし、ワンウェイ瓶やPETボトルなども多数。

グリーンコンシューマー化の限界に関しては、消費者の置かれた現実を知ってもらうことに力点を置いた。受講生に注目してもらったのは以下のような点である。

- ・魚・肉売り場：ラップ・トレーが中心。購入時にパッケージ化されているものが圧倒的多数(一部、必要量をポリ袋に入れるシステムあり)
- ・清涼飲料水コーナー：PET・缶が中心だが、容器の容量・形状・材質はまちまちでありかつ多様。
- ・めんつゆ等のPETボトル：見た目はあきらかにPETボトルなのに分別はその他プラスチックとなる。
- ・弁当・惣菜コーナーの充実：ライフスタイルの変化による家庭での調理の減少。

<sup>8</sup> 表1にあるとおり、ラベルワークに先立って、22人の受講生を、最終報告のために4つのグループに分け、アイスブレイクのためにコンセンサステストを行っている。コンセンサステストとは、登山での遭難や月での遭難などのシチュエーションの中で、なすべき行動や残すべき道具を選ぶのだが、個人の意見を決定した後に、グループ内で、メンバーがそれぞれ選択の理由などを述べながら、意見を統一させていくものである。解答は得点化することができ、グループ同士を競わせることも可能であるが、コンセンサステストの主要な目的は、グループとしての解答をまとめるという作業を通じて、グループ内に議論をする環境を作り出すことにあるといえる。

#### )清掃工場・リサイクルプラザ

清掃工場およびリサイクルプラザについては、事前の申し込みがあれば見学コースが定まっております。職員が同道して施設に関する説明を加えていただくことができます。見学には旭川市における廃棄物処理とリサイクルに関するレクチャーも付いており、旭川市内における処理システムの概要を知ることができます。

清掃工場とリサイクルプラザの見学の直後に、「焼却処理のメリットとデメリット」という内容で講義をしたのには意味がある。日本においては焼却という手段が一般的だが、それには一長一短があるということ、近年進められているごみ発電についても、廃棄物の減量という観点からは矛盾した側面があるということを知ってもらうということを意識したものであった。

#### (4) 報告準備・予備

4日目は、すべて最終報告のための報告準備に充てた。まず、ラベルワークの結果を基点としながら、各グループにおいてディスカッションを行い、最終報告の方向性について意思決定し、それにしたがって情報収集を、時間の制約があったためにインターネットに限定して行った<sup>9</sup>。報告の形態についても各グループで検討し、決定してもらった<sup>10</sup>。幸い、情報処理演習室が終日使用可能だったので、そこで作業ができた。

報告準備については、グループによる作業を中心に進めていただき、筆者は、必要な物品の手配や、受講者からの質問があった際の助言程度に関与は止まった。5日目の予備時間については、1グループを除いて前日に作業が終了したため、豊島の産業廃棄物問題と環境教育の実践に関するビデオ放映を行った<sup>11</sup>。

最終報告については、1グループ20分で口頭発表を行ってもらった。おおむね短時間でまとめた内容としては非常に質の高い報告となった。

## 4. 受講生の評価

本校の教育研究委員会が行った受講者アンケートに対して、本講座に対して18名からの回答があった。その記述を追いながら、本講座に対する受講者の評価を見ておこう<sup>12</sup>。

### (1) 評価の高かった点

受講者の評価が高かったのは、ラベルワークをはじめとするグループ作業と施設見学についてである。ラベルワークについては、実際にやってみて楽しいという意見の他に、調べ学習の手段として学校教育の現場においても可能性があるという意見や課題の設定や問題の整理のために有用であるという評価もあった。また、ラベルワークなどのグループ作業によって受講者同士の交流が深まるということが、教員としての情報交換という点からも有意義なものになったという記述もあった。筆者の偏見である可能性もあるが、未だ「講義」形式が主流である学校教育の現場にいる教員にとっては、ラベルワークやグループディスカッションといった方法は、今までにない新鮮さがあったようである<sup>13</sup>。

施設見学については、一部に、スーパーについて、普段と違う視点で見ることができたことについて評価する記述があった他、教材としての利用可能性があるとの言及もあった<sup>14</sup>。こうした意見は、普段目の前にあるいろいろなものについて意味を見出すということが社会科教育の重要なミッションであると考えている筆者にとって、そう

<sup>9</sup> 講義で配布したレジュメや、補足資料として配布した報告書（北海道教育大学旭川校社会学研究室編，2005；2006）などを一部利用したグループもあった。

<sup>10</sup> 4グループのうち、3グループはA4用紙10枚弱程度のレポートとして、1グループがポスターにより最終報告を行った。

<sup>11</sup> 報告のリハーサルを行いたいと希望するグループが多数であったため、ビデオ放映の後半部分は受講者の選択に任せた。

<sup>12</sup> 基本的には、実際の評価よりも甘いものになっていると考えた方がよいと思われる。

<sup>13</sup> アンケートの中にも、いくつか「新鮮」という言葉がみられた。生涯教育もしくは社会教育の場面では、ごく一般的に行われている手法であるだけに、今後は学校教育と社会教育との連携が一層進展されなければならないのではないだろうか。

<sup>14</sup> スーパー見学に関しては、表の部分だけでなく、一般に見ることのできない裏の部分を見ることができたらもっと良かったという意見が2名から寄せられた。これは非常に難しいところであるが、今後の検討課題として考えていかなければならないところでもあるだろう。また、一市民として意識の改革になったという記述があったことは、筆者としては嬉しいことであった。実際、筆者の意図としてこのような「陰の」目的があったことを付け加えておきたい。おこがましい言い方になるが、筆者の意図としては、今回の講座は、教員に対する環境教育の場となるべきものであった。

した反応が返ってくることは喜ばしいことであった。

講義に関しては、評価が分かれる結果となっている。好意的な評価を拾っていくと、専門性を高める上で有意義だったという意見が多数あった。「教師の専門性を高める上で大変良かった」、「廃棄物についての考え方を改めさせられた」、「外国との比較も含めての講義で大変わかりやすかった」などの評価は身に余る光栄であった。

## (2) 講座に対する批判意見

一方で、講義については、学校教育の場でどのように生かせるかという点に疑問を呈する意見があった。内容がわかりにくいという意見はなかったが、講義が多いという意見は複数あった。回答が比較的穏健なものとなる可能性が高いことを加味すると、5回の講義は、本講座のようなテーマの場合、やや多いのかもしれない<sup>15</sup>。また、配布したレジュメに関してはそれなりに評価していただいたものの、レジュメに沿って話をするという形態はやや冗長さを感じさせてしまったようである。「話が長く、集中が続かなかった」、「受講者を引き付けるような話を願いたい」、「もう少し視覚に訴えるものがあったら良かった」などの意見が寄せられていた。今回の講義については、やや工夫が足りなかったことを反省しなければならないようである。

また、施設見学においては、筆者の準備不足で受講者には多大な迷惑をかけてしまう結果となった。これについては後段であらためて述べようと思うが、批判意見がかなり寄せられていたことに対して、あらためて真摯に受け止めなければならない。企画がよくても、事前の準備がしっかりしていなければ、結果として受講者に不快感を覚えさせることになるということを、講座の企画者は肝に銘じなければならない。

最後に、講座全体に関する批判的意見として、環境教育の実践例についてもっと詳しく紹介してほしいという意見があった。当初筆者が危惧していたことが指摘された形となってしまった。

## (3) その他の批判的意見

圧倒的に多かったのは、駐車場に対するクレームである。物理的に限られた空間であるため、これをクリアすることはかなり難しいだろう。意見の中には、事前に公共交通機関の情報があればよかったというものもあった。基本的に大学構内での作業になるということを考えると、あえて自家用車での受講を原則認めないというやり方はありえるのかもしれない。ホテルの紹介をしてほしいという意見もあったが、これを考えると、遠方からの受講生についてはある程度まとまって宿泊してもらい、大学のバスで移動してもらうことを検討してもよいかもしれない。

事前連絡に関する不満も非常に大きい。上記の駐車場や持ち物などについて、もう少し丁寧な対応があった方がよいという意見が多数寄せられた。確かに、講座開設にあたって十分に情報提供できていたとはいえないように思う。遠方からの受講生も多いため、この点は改善されるべきであろう。

講座開設にあたって受講者の意向がほとんど講師に伝わらないという不満も寄せられた。手探りで講座を進めなければならないという状況は、講師にとっても受講者にとってもストレスの原因となる。研修自体が機能するためには、講座開講以前の相互理解が、多少なりとも必要ではないだろうか。

もう一つ多かったのは、研修という仕組みそのものに対する批判的意見である。「研修期間が長すぎる」、「場所が旭川でなければならないのか」<sup>16</sup>「単体式にしてほしい、10年目と限らず、随時研修が可能な仕組みにしてほしい」という意見などがあつた。筆者は、研修の意義はあると考えるが、受講生の一部にこうした意見があるということは、やはり真摯に受け止めなければならないだろう。これらの意見は、大学側の努力だけではどうにもならない問題でもある。こうした意見の背景には、受講者側に、研修に対する理解がないということもあると思われるが、研修のシステムの欠陥がないとは言いきれない。一つ一つの意見を精査しながら改良を加え、受講者にとって意味あるものであると認識できるようなものにしていかなければ、続ける意味はない。

## 5. 自己評価

これまでの検討を踏まえて、ここで簡単な自己総括をしておきたい。

<sup>15</sup> 「初日の共通講義は、現場に身近で、身につくものであった」という意見や「専門講座の選択肢に特別支援教育がなく残念。すぐ仕事に活かせる講座であってほしい」という記述があり、必ずしも講義形式の講座が総じて敬遠されるというわけではなさそうである。逆に言うと、講義形式のふさわしい内容と、そうではない内容とがあると考えべきだということだろう。

<sup>16</sup> 網走管内の教員も多いので、北見サテライトで開講してほしいという趣旨の意見もあった。

### (1) 評価できる部分

受講者の評価のくり返しになるが、フィールドワークやラベルワークなど、座学以外の手法を取り入れたことで、受講者の興味をそれなりに引くことができたのではないかと自負しているし、そもそも受講者がそれなりの問題関心を持って受講してきた可能性があるにせよ、認めてよいと考える。単純に、このやり方がベストだとは言わない。ただ、より積極的に言えば、多くの講座で取り入れるべきものではないかと考える。フィールドワークに関しては、こちらの期待以上に良い反応が返ってきた。「教える」立場で行っていた場所も、「教えられる」立場で行くことで新たな発見があったようである<sup>17</sup>。

そして、自分の行ってきかことと結びつけることができたことである。専門的な知識を「有機的に」講座に活用することが可能になったということは、社会学のような実践的要素を含むことを要求される学問においては、こうした場はむしろ貴重であると考えべきであるのかもしれない。もう少し言えば、あくまでも広い意味において、講習が自分の研究発表の場になるということが、「互酬的」な関係として重要である。大学側として「やらされ」感があっては、本来ならない。

### (2) 反省点・課題

初めてということもあるだろうが、今回の講座については反省点・課題がかなり多い。

第一に、講座名を、深い配慮なくつけてしまったがために、部分的に自分の首を縛る結果となったことである。フレキシブルに対応できる自信のある場合は別として、限られた期間でミッションをこなすためには、課題をタイトにした方が自分のためにも受講者のためにもなる。

第二に、受講者数を正確に把握した上で講座の運営を検討する必要があるということである。想定外の人数が来ることありえるが、基本的にはすべて受け入れるべきである。したがって、受講生の人数に合わせた講座運営が可能ないように、いくつかのパターンを想定しておくべきである。

第三に、当初考えていたのは、フィールドワークをかなり多く取り入れた講座運営であったが、結果として当初の予定を大幅に削らざるを得なかったことである。短期に集中した時間の中で、移動時間や移動手段を考えた場合、フィールドワークはきわめて限定的となる。フィールドワークの有効性は相当高いと思うが、限界がある。

第四に、受講者は総じて受身の姿勢が強かったこと、そして、残念ながら、受講者の中に温度差があったことである。これは、筆者の講座が知識習得に重点が置かれており、教育現場での実践に直接結び付けて考えにくいということが大きく影響しているのかもしれない。そして、良くも悪くも、教員は現場の仕事に追われて余裕がないのかもしれない。

第五に、見学先での不手際が重なったことである。スーパー見学では、事前に許可を取っていなかったために、店側からのクレームが来たこと、大人数だったために、説明が十分いきわたらなかったことがあげられる。清掃工場見学でも、連絡の不徹底で移動に手間取ってしまった。

## 6. おわりに

あらためて振り返ると、反省点の多い講座運営であったことに忸怩たる思いが残る。そんな講座ではあったが、受講者アンケートの中に、「次年度も講座を続けてください」などの嬉しい意見もあった。すべての人を満足させることは不可能であるだろう。正直、受講者の中の温度差も気になるところであった。しかし、そうした「言い訳」に甘んじることなく、目標を高いところに設定しながら、一人でも多くの受講者に満足を感じさせることができるよう、次回の構想を練りたいと思う。

### 参考文献

- ・ 川喜田二郎, 1967, 『発想法 創造性開発のために』中公新書.
- ・ 北海道教育大学旭川校社会学研究室編, 2005, 『ごみ問題を考える 北海道教育大学旭川校社会学研究室調査報告 vol.2』.
- ・ 北海道教育大学旭川校社会学研究室編, 2006, 『ごみ問題を考える 北海道教育大学旭川校社会学研究室調査報告 vol.3』.

<sup>17</sup> 社会見学などで清掃工場の見学は多くの受講者が経験していることが想定され、若干の不安があったが、受講者の多くが相対的に人口閑散地域の教員であったことも、都市部に位置する旭川での施設見学を新鮮なものにさせた理由の一つかもしれない。